

## 明治後期における漢語の基本語化

田中 牧郎 (明治大学・国立国語研究所) †

### Inclusion of Sino-Japanese Words into Basic Vocabulary in the Late Meiji Japanese

TANAKA Makiro (Meiji University · National Institute for Japanese Language and Linguistics)

#### 要旨

明治時代の語彙は、漢語に大きな変化がある。近代語の雑誌コーパスの年次別の語彙頻度を指標に、語彙をレベル分けして、年次によるその移行を見ることで、明治後期に基本語化した漢語を抽出することができる。その基本語化した漢語は、科学技術や社会制度を表す語、及び、抽象概念を表す語に多いが、後者の場合は、既存の和語や漢語との間で使い分けられることで、新しい語彙体系を構築していく役割がある。

#### 1. はじめに

明治時代は、初期に非常に多かった漢語が次第に淘汰されていくが(池上 1984、今野 2014 など)、この時代に漢語がどれだけあり、どのような語が淘汰され、どのような語が定着したかということになると、資料が多種多様であることもあって、従来の研究では明らかにされてこなかった。しかし、近年、国立国語研究所で整備が進められてきた近代の総合雑誌のコーパスによって、その具体的な状況を知ることができるようになってきた。雑誌、とりわけ総合雑誌は、多彩なジャンル、幅広い執筆者、厚い読者層などの点で、当時の書き言葉をかなりの程度代表できるものと見ることができ、書籍や新聞など他の媒体に比べて、コーパスが備えるべき代表性を、一種の資料でありながら備えているからである。国立国語研究所では、総合雑誌『太陽』(1895(明治28)-1928(昭和3))、学術総合雑誌『明六雑誌』(1874(明治7)-1875(明治8))などのコーパスを開発してきた(国立国語研究所 2005、2012)。そして、まもなく、総合雑誌『国民之友』(1887(明治20)-1898(明治31))の、創刊時の2年分を対象とした『国民之友コーパス』を、公開予定である(国立国語研

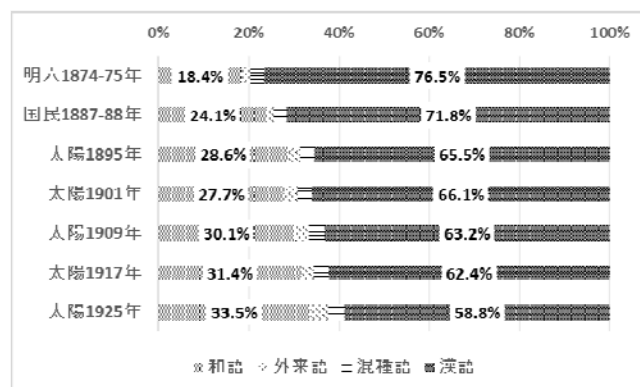


図1 語種構成比率の推移 (異なり語数)

† makiro@meiji.ac.jp

究所 2014)<sup>1</sup>。上記の3つのコーパスを用いて、年次別の語種構成比率を異なり語数で算出すると、図1のようになる。明治初期には漢語の比率が非常に高いが、それは次第に低下していき、代わりに和語が増加していく傾向が明確に見てとれる。漢語が、明治初期に氾濫し、その後大正末期までに次第に淘汰されていく量的な様子を、具体的に知ることができる。

しかし、このような語種構成比率の調査だけでは、どのような漢語が淘汰され、どのような漢語が残存したかや、なぜこのような変化が起こったかについては、不明なままである。図1に見られるような大きな流れの背後にあった具体的な言語変化を研究していくには、語彙の内部に分け入って考察していく必要がある。語彙の内部に分け入る方法として、本稿では、コーパスにおける頻度情報を指標とした、基本語・周辺語の軸での語彙変化の見方を採用し、とりわけ周辺語から基本語へと変化していく「基本語化」する語彙を抽出し、それがどのようなものであるかについて考えたい。

## 2. 基本語化のとらえ方

### 2.1 語彙のレベル分け

語彙を星雲に喩える樺島(1981)などの考えをもとに、田中(2012b・2013)では、語彙の中心に、安定してよく使われる「基本語」があり、その周辺に、不安定であまり使われない「周辺語」があると見立て、この基本語と周辺語の軸で近代の語彙を研究する視点を提示した。代表性を持つコーパスの場合、高頻度の語が基本語に相当し、低頻度の語が周辺語に相当すると見なすことが可能であり、『太陽コーパス』の各年次の語彙を、頻度によってレベル分けし、そのレベルを「基本レベル」「中間レベル」「周辺レベル」に分類し、語彙の変化・不変化の様子を概観した。

表1 語彙のレベル分け (『国民之友コーパス』『太陽コーパス』)

レベル	使用率の累積	国民 1887-88	太陽 1895	太陽 1901	太陽 1909	太陽 1917	太陽 1925
a	-78%	-35	-46	-51	-54	-53	-40
b	78-88%	34-12	45-17	50-19	53-19	52-19	14-39
c	88-94%	11-5	16-7	18-8	18-8	7-18	13-6
d	94-97%	4-2	6-4	7-4	7-4	6-4	5-3
e	97-100%	1	3-1	3-1	3-1	3-1	2-1
異なり語数		31,928	49,773	43,049	38,383	36,387	38,221

表1は、田中(2012b)で行った『太陽コーパス』5年次分のレベル分けと同じ基準で、『国民之友コーパス』1887-88年分の語彙にもレベル分けを施し、それら全体の基準を示したものである(数字は頻度)。各年次の語彙を頻度(使用率)順に配列し、使用率の累積が

<sup>1</sup> それぞれのコーパスの概要や、それらが持つ代表性については、田中(2005)、近藤・田中(2012)、近藤ほか(2014 予定)などを参照してほしい。

78%に達するところまでをレベル a、その後 88%までをレベル b というように、a~e の 5 段階に区画する。例えば、『国民之友』1987-88 年では、頻度 35 以上の語がレベル a に属し、頻度 34 以下 12 以上の語がレベル b に属することになる。なお、『明六雑誌コーパス』は、『国民之友コーパス』と十数年の開きがあり、他の年次が 6~8 年刻みであるのに比べて離れすぎているため、頻度推移を考察するには不適切だと判断して、今回の調査資料からは外した<sup>2</sup>。

## 2.2 基本語化した語彙の抽出

個々の語において 5 段階に分けたレベルが、年次によってどのように変化する（変化しない）かを見ることで、語彙の中での各語の位置の変化・不変化を見ることができる。表 2 は、50 音順の語彙表のうち、マ行の冒頭 7 語について、年次別のレベル情報を一覧にしたものである。例えば「間（ま）」は、すべての年次でレベル a であり、この時代基本語であり続けた語である。一方、「間合い」「マーカンタイル」は、どの年次でもレベル e または「-」<sup>3</sup>であり、ずっと周辺語だった語である。そして、すべての年次がレベル b・c・d のいずれかに入っている「真（ま）」は、中間語で不変だったと言える。これらが語彙の中での位置を変えない語であるのに対して、「まあ（副詞）」は、当初レベル e だったものが、レベル b そしてレベル a へと一定方向に変化するもので、変化した後はレベル a のままで基本語として安定する。なお、「魔」「まあ（感動詞）」は、いずれかのレベルで安定したり、一定方向に変化したりすることはなく、特徴のはっきりしない語である。

表 2 年次別のレベル情報 (50 音順語彙表マ行冒頭 7 語)

語彙素読み	語彙素	品詞	語種	1887-88	1895	1901	1909	1917	1925
マ	魔	名詞	漢	-	b	d	c	b	b
マ	間	名詞	和	a	a	a	a	a	a
マ	真	接頭辞	和	d	b	c	b	c	b
マア	まあ	副詞	和	e	b	a	a	a	a
マア	まあ	感動詞	和	c	e	b	b	b	b
マアイ	間合い	名詞	和	-	-	-	-	-	e
マーカンタイル	マーカンタイル	名詞	外	-	e	-	e	-	-

このようにして作成した、レベル情報を一覧にした全語彙のリストをもとに、ここでは全年次を通じて、基本語化の方向が明確に見てとれる語を抽出することにした。具体的には、図 2 の●を付した範囲に収まる語を抽出し、これを基本語化した語と扱うことにした。

<sup>2</sup> 『明六雑誌コーパス』と『国民之友コーパス』の間の位置にある、1881 年（明治 14 年）ごろの雑誌などのコーパス化が求められる。

<sup>3</sup> 「-」は、当該年次には使用例がない（頻度 0）ことを示す。

レベル	1887-88年	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年
a				●	●	●
b			●	●	●	
c		●	●	●		
d	●	●	●			
e	●	●				
-	●					

図2 基本語化の抽出基準

図2の基準で抽出した基本語化した語彙は、固有名詞を除くと、81語となった。それを、語種別に五十音順で掲げると次の通りである。

●和語 (28語)

明るい、いらっしゃる、要る、偉い、型、決まる、心持ち、強い、直ぐ、すっかり、ずっと、立場、経つ、立つ、たらしい、小さな、ちゃんと、薦、冷たい、何の、捕られる、亡くなる、何しろ、名前、太る、丸で、もっと、漸と

●漢語 (50語)

圧迫、栄養、援助、解決、階段、閣議、拡大、可能、期待、気分、共通、協定、具体、見地、講演、貢献、向上、興奮、合理、考慮、国有、色彩、支持、実現、手術、信念、推薦、生殖、節約、対抗、大変、妥協、徹底、到頭、特徴、都市、努力、内容、肉体、発展、飛行、皮肉、不安、復興、奮闘、本能、有権、有利、率、廊下

●混種語 (3語)

かなり、大した、駄目

### 3. 基本語化した語彙の分類

#### 3.1 口語的な語

前節で抽出した基本語化した語彙81語は、どのような性質を持っているだろうか。まず、第一に、口語的な語の一群がある。

例えば、和語の4番目にある「偉い」は、『国民之友コーパス』には1例のみあり、次のように、小説の会話文で使われている。

「ホ、それはおえらいな！」(『国民之友』1887年27号、二葉亭四迷「あひびき」)

この語は『太陽コーパス』の初年次の1895年には十数例見られるが、そのほとんどは、下の例のように小説等の会話の引用文か、口語体で書かれた記事に見られ、文語部分にはほとんど使われていない。口語部分に使用範囲が限定されることから、この語は口語的な性格が強かったと考えられる。

最う奥村様はえらいお方でございますよ。(『太陽』1895年2号、川上眉山「書記官」)  
其えらい所は我々の師匠とするに足りるから(『太陽』1895年11号、田口卯吉「歴史は科学に非ず」)

同じように、コーパスでの使用箇所を見ていくと、初期の年次では会話の引用や、口語体の記事に使用範囲が限られる傾向にある語として、次などが指摘できる。

●和語 (24 語)

いらっしゃる、要る、偉い、決まる、心持ち、強い、直ぐ、すっかり、ずっと、経つ、立つ、たらしい、小さな、ちゃんと、冷たい、何の、捕られる、亡くなる、何しろ、名前、太る、丸で、もっと、漸と

●漢語 (3 語)

気分、大変、到頭

●混種語 (3 語)

かなり、大した、駄目

和語が多いが、漢語、混種語のなかにも、口語的な語はある。明治後期は、書き言葉が文語体から口語体に移行する時期であり (山本 1965、森岡 1991、野村 2013、田中 2013 など)、その変化に伴って、文章の中に口語的な語が使われることが増え、それらが書き言葉における基本語に加わっていくのだと考えられる。

### 3.2 科学技術や社会制度を表す語

基本語化した語彙には、第二に、科学技術や社会制度を指す一群の語彙がある。

例えば、漢語の2番目にある「栄養」という語は、『国民之友コーパス』には全く使われておらず、『太陽コーパス』の最初の年次には、次の2例だけが見られる。

身軀の栄養に充分意を注いで、少許の時間で多量の安眠を遂げる工夫を回らして、『太陽』1895年12号、石橋思案「睡眠の節減」)

吾人にありて栄養液は血液と混入し心臓の作動に因りて軀内を循環すると同じく蝶にありても亦心臓と稱するポンプ様のものありて其伸縮に依りて此營養液を全軀内に循環せしむるものなり (『太陽』1895年9号、石川千代松「蝶の話」)

人体についての科学的な説明の中に用いられている。石川千代松「蝶の話」の例には、すぐ後に「營養」も見られ、この表記は、この記事に他に3例、『太陽』1895年の別の記事に1例見られ、「栄養」と同じ意味を表している<sup>4</sup>。また、次のように「衛養」という表記も1例あり、これも「栄養」「營養」と同じ意味である。

身軀の衛養に毫も思ひ至ることなく (『太陽』1895年7号、前田正名(談)「肉食の必要」)

これらの例のうち、はじめに掲げた、石橋思案「睡眠の節減」が「雑録」の欄に収められているほかは、「科学」または「農業」の欄の記事で、専門的な科学ジャンルの文章であ

<sup>4</sup> 『日本国語大辞典第2版』の「語誌」には、「蘭学の訳書にも「營養」「栄養」が併用された」「明治から大正にかけては「營養」の方が優勢であった」と記されている。

る。「栄養」(他の表記も含む)は、科学用語として使われ始めた語だと見られる。それが次第に一般に普及していくとともに、基本語化していくと考えられる。

社会制度を指す一群の語についても同様に見ることができる。例えば「国有」は、『国民之友コーパス』には皆無で、『太陽コーパス』の初年次には、次の1例だけが見られる。

ペクトウキチは前国有鐵道長官たり (『太陽』1895年10号、無署名「海外彙報」)

この「国有鐵道」は、セルビアの時事を報告した記事に使われているもので、この時点では海外の制度を指す語である。ところが、次の年次の1901年には日本の鐵道の国有について論じる部分で多く使われるようになり、鐵道以外にも使われている。

鐵道国有の建議案が、不成立となりしは、最も滑稽なりき。(『太陽』1901年1号、国府犀東「政治時評」)

我國の森林に於て国有林は一千萬町歩、御用林三百萬町歩、民有林七百三十萬町歩にして (『太陽』1901年5号、高橋琢也(談)「林政論」)

以上のような、基本語化した、科学技術や社会制度を指す語はすべて漢語であり、次がそれに該当しよう。

#### ●漢語 (12 語)

栄養、閣議、協定、国有、手術、生殖、都市、肉体、飛行、本能、有権、率

### 3.3 抽象概念を表す語

以上の二つの理由では説明できない語が、たくさん残る。次のようなもので、いずれも抽象概念を表す語で、大部分を漢語が占める。

#### ●和語 (3 語)

明るい、型、立場

#### ●漢語 (35 語)

圧迫、援助、解決、階段、拡大、可能、期待、共通、具体、見地、講演、貢献、向上、興奮、合理、考慮、色彩、支持、実現、信念、推薦、節約、対抗、妥協、徹底、特徴、努力、内容、発展、皮肉、不安、復興、奮闘、本能、有利

これらのうち、下線を引いた語については、本稿とは別の指標を用いて、『太陽コーパス』から定着する漢語サ変動詞を抽出し<sup>5</sup>、その背景や事情を考察したことがある(田中2011)。

それによれば、「向上」は、当初、文学や宗教の分野で、心を上向させる意味を表していたが、1909年からは、他のジャンルでも用いられるようになり、心以外の事物が上向くこ

<sup>5</sup> その抽出においては語の「定着」という観点を取った。そこでの「定着」は、頻度の増加傾向や新しさの度合いなどによって抽出したもので、本稿の「基本語化」の観点が語彙のレベルの変化によって抽出しているのとは、異なっている。しかし、結果的に抽出された語は、重なっているものも多い。

とも表し、同時に動詞用法を持つようになる。「興奮」は、当初、外的要因が精神などを高ぶらせる他動詞用法が主であったが、1909年から自動詞用法が主になり、高ぶる要因は明示されなくなり、その頃から頻度が増加する。「考慮」は、当初、行政の分野で、自らをすり減らして苦心するような意味を持っていたが、頻度の増加と使用される分野の広がり目立つ1917年ごろからは、自ら前向きに工夫するような意味へと変わっていく。さらに、「実現」は、当初は、文学のジャンルで、現実化が容易でない貴い事柄を現実のものとする意味であったが、頻度が増加しジャンルも広がる1909年からは、さして困難を伴わないあたり前のことを現実化する意味で使われるようになる<sup>6</sup>。そして、「努力」は、当初は、相当地に力を込めて奮闘して頑張ることを意味したが、頻度が急増する1909年からは、特別な力の込め方はなくなっていく<sup>7</sup>。以上の基本語化する語の中には、「考慮」に対する「考える」「慮る」「顧慮」、「実現」に対する「あらわす」「あらわれる」「表現」「出現」、「努力」に対する「つとめる」のように、基本語化にあたって、類義の和語や漢語との間に使い分けの関係形成し、新たな語彙体系を構築していくものも目立っていた。

上記のリストで下線が引かれていない語についても、基本語に際して意味変化があったのではないかと予想される。また、その意味変化の過程で類義語との使い分け関係をつくり、新しい語彙体系を構築していく動きがあったのではないかと予想される。そのことを実証するような、個々の語の用例を分析する研究が期待される。

#### 4. おわりに

以上本稿では、語彙頻度に基づくレベルを指標として、基本語化が明瞭にとらえられる81語を抽出し、それらがどのような語であるかを考察した。その結果、(1)口語的な語、(2)科学技術や社会制度を表す語、(3)抽象概念を表す語、の三つのタイプに分かれることが分かった<sup>8</sup>。基本語化の基準として今回採用したものは、かなり厳格なものであり、ここで抽出されたものは基本語化の傾向が極めて著しいものに限られ、そのような語に指摘できた上記三つのタイプは、この時代に基本語化する語彙の性質として重要なものと見てよいだろう。基本語化の傾向にある語は、基準を緩めることで、もっと多く抽出していくことができるだろう。

三つのタイプのうち、(1)は、言文一致運動の直後の時代である明治後期という時代に特徴的なものだと考えられる。(2)も、科学技術が著しく発展し、社会制度が大きく変革された近代化の時代だからこそ目立つものと言えるが、語が指示する対象物の発展や変革によって語が基本語化するという構図は、他の時代の語彙の変化にも適用できるものだと考えられ、他の時代に基本語化する語と比較することが必要だろう。

(3)は、(1)(2)と違って、明治後期という時代の性質から即座にこれを説明することは難しい。しかし、語数は(1)と並んで多く、この時代の語彙変化で最も目立つ漢語に特に多いことから、語彙変化の本質に関わる現象ではないかと予想される。昭和戦後期から平成期にかけての新聞における外来語の基本語化を研究した金(2011)は、その大半を抽象概念を表す外来語が占めていることを明らかにし、「トラブル」「ケース」などを例

<sup>6</sup> 「実現」については、田中(2012a・2013)において、より詳しく考察した。

<sup>7</sup> 「努力」については、田中(2006)において、より詳しく考察した。

<sup>8</sup> このことの見通しは、田中(2013)でも述べたが、本稿は、それを実証するものという位置付けになる。

に、基本語化の背景には、既存の和語や漢語の類義語との意味的な関係があることを示している。これは、本稿で見た、明治後期に基本語化する漢語の性質や、その背景にある類義語との意味関係と、類似性が高い。明治後期の漢語の基本語化と、昭和戦後期から平成期の外来語の基本語化とを、対比的に研究し、基本語化現象を日本語史の中に位置付けていく研究が求められよう。

#### 付記

本研究は、NINJAL 共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」(プロジェクトリーダー: 田中牧郎)、及び、JSPS 科学研究費基盤研究 (C)「近現代日本語彙における「基本語化」現象の記述と類型化」(26370529、研究代表者: 金愛蘭)による成果の一部です。

#### 文献

- 池上禎造 (1984) 『漢語研究の構想』(岩波書店)
- 樺島忠夫 (1981) 『日本語はどう変わるか—語彙と文字』(岩波新書)
- 金愛蘭 (2011) 「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」(『阪大日本語研究 別冊 3』)
- 国立国語研究所 (2005) 『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』(博文館新社、CD-ROM)
- 国立国語研究所 (2012) 『明六雑誌コーパス』(国立国語研究所コーパス開発センターWeb サイト)
- 国立国語研究所 (2014 予定) 『国民之友コーパス』(国立国語研究所コーパス開発センター Web サイト)
- 近藤明日子・小木曾智信・高田智和・田中牧郎 (2014 予定) 『『国民之友コーパス』の開発』(『日本語学会 2014 年度秋季大会予稿集』)
- 近藤明日子・田中牧郎 (2012) 「『明六雑誌コーパス』の仕様」(田中牧郎ほか (2012) 『近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書』(国立国語研究所共同研究報告 12-03 所収))
- 今野真二 (2014) 『日本語の近代—はずされた漢語』(ちくま新書)
- 田中牧郎 (2005) 「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」(国立国語研究所『雑誌「太陽」による確立期現代語の研究』博文館新社)
- 田中牧郎 (2006) 「「努力する」の定着と「つとめる」の意味変化—『太陽コーパス』を用いて—」(倉島節尚『日本語辞書学の構築』おうふう)
- 田中牧郎 (2011) 「近代漢語の定着—『太陽コーパス』に見る—」(『文学』12-3、岩波書店)
- 田中牧郎 (2012a) 「新漢語定着の語彙的基盤—『太陽コーパス』の「実現」「表現」「出現」と「あらかず」「あられる」など—」(『日本語の学習と研究』160)
- 田中牧郎 (2012b) 「明治後期から大正期の語彙のレベルと語種」(田中牧郎ほか (2012) 『近代語コーパス設計のための文献言語研究 成果報告書』(国立国語研究所共同研究報告 12-03 所収))
- 田中牧郎 (2013) 『近代書き言葉はこうしてできた そうだったんだ!日本語』(岩波書店)
- 野村剛史 (2013) 『日本語スタンダードの歴史』(岩波書店)
- 森岡健二 (1991) 『近代語の成立 文体編』(明治書院)
- 山本正秀 (1965) 『近代文体発生の史的研究』(岩波書店)